藤井徹著

菓木栽培法

二

福岡第一師範學校
（學校圖書）
登錄番號 第 號
門 部
果樹栽培
項 目 次
全 1 冊ノ内第 1 冊
分類番號 第 624. 號

福岡縣福岡師範學校
圖書 博物門
博物部 植物
番 33
號 2
8 冊ノ内

T1A1
61
F57

菓木栽培法卷之二

東京　藤井徹　著
坂本德之校
加藤竹齋画

田中芳男閲

其二　挿木法

第八章　挿木の總論

挿木ハ樹の枝或切取りて、土中ヨ挿置キバ、是ヨ根或生ド又葉或生ドたる者或養ひ育る仕方なり。然るヨ樹ヨも各々稟得たる性質ありて、其性ヨ順じて技或施さゞきバ弊或受ること多し。故

る此法なども畑挿埋挿垣挿代挿床挿玉挿割挿撞木挿泥挿横挿の別ありて苗木の着生成長に於て多少の得失ありきなど此法に依れば菓實花葉等の變ずる患なく命根のみにて植替がたき煩なく菓實の熟時後るゝの弊なし接木もるの勞なきば別して良法なりと云ふべしきば此技も古昔に至て疎漏なりしと見えて書にもきゝなど精しく記載たる者もなけれど近今にて漸々に發明せし事も多くなり萬木共に此法を用ゐて種殖そしの出来べき無上の良法となりけきは後世此學の進歩に從ひて遂に他の實蒔接木の類も殆ど廢るに到るも量り難く思はるゝなり然れども品類に依りて成長遲き者あり或は着生し難き者あるは世上にまゝ此技の精巧ならざる所以にして之を爲に當今接木の砧を作るのみに專ら之を用ゆる者あり又此法を以て作りたる樹は年齢を久しく保ち難しと云世上の說ありきしも未だ是を驗し試みたる事なけきば確證を得て立言し難し然れども衰へたる大木の太根を切詰て善く育つきば

再び繁茂して、數百年生活するもあり、又古より葡萄ハ、取木よりて作り来るとも、實蒔と異なる論なる哉聞ゝ、又挿木よりても筆の軸位の太さ成長宜しき者ハ、根の形状實生と異なるなり、殊ニ去年生の氣條を埋挿したる者も、一年よりして根を繁く生じ長さ五六尺ニ到るもあり、又桑ハ一昨年生の枝を挿しても、土中ニ埋たる部ハ悉く根と化る等を以て考ヘハ些少も年齢ニ管係なしとハ、有まじき事と推量せり、尤も其内不巧者ありて、根生ぜざるもあり、或ハ木口より腐入るの類ハ、實蒔ニ癖の着たる者ニ均しきなるべし、尚又老練の人ニ質し、他日其確證を得て記載せんと欲す、

第九章　挿穂の擇方　附り　切取の時刻

凡そ種穂を擇みて切取り、是を貯へ、或ハ遠方へ送る事ハ、挿木ニ接木ニハ於て、大畧通用ス、然ども其内ニ少し用法の差ひなる者ハ、序を追て辨説すべし、扨挿穂ハ一ヶ年ニ根より直ニ立ちて、三四尺も延たる氣條を最上とし、其内を三つニ切りて、本の部を極上とし、中ハ是ニ次

梢ハ用ゐし又新枝の勢力よく延たるもよし又二年三年の枝も勢力宜き者を用ゆべし數十年の古枝とても根株生ぜざるにハあし唯暑中後ハ出て質柔らハ心髓太き者ハ惡きのみ而して草木ハ總て日中ハ大陽の光を見る間ハ全身萎弱の狀を頭し朝夕露を受る時ハ勢力壯ハして水分多し然るハ其水分多き者を挿木ハも接木ハも必ず傷み易れバ用ひて惡し故ハ種穗を切るハ必ず快晴の日を擇みて其日中取るべし若し雨後又ハ早朝ハ切取たる者ハ土を盛し鉢へ挿し日蔭ハて風の中らぬ場所ハ暫く置き水氣稍乾きたる時を見て用ゆべし

第十章　挿木の期節

落葉樹ハ早春稍暖氣ハふりて芽の少々光澤着たる節ハ宜し是を春挿と云ハ常緑樹ハ六月ハ春芽の枝固りて充分ハ肥たる時ハ宜し是を夏挿し云又薔薇の類ハ秋九月下旬ハ芽の固りたる頃用ゆ是を秋挿と云尚一般の樹木の中ハ落葉樹ハ夏挿法を用ゆ常緑樹ハ春挿法を用ゆるもあきらも菓樹ハ都て以上の規則ハ違ふも

なし、又決して秋挿法は用ゆるとなし、然れども是又其樹性に依て、期節は幾何の不同あれば、一概に相當の時日は示し難し、大率老練の人は毎に其心得を以て處分ふること多し、但し其大器に尚各樹の下に記べし、又暑中寒中とも隨分挿て着生すれども、根は生ずること寡く、延ひ惡しく大に好期節は及ぶべし、又何の木にても總て着生せざるはなし、但其期節を謬ること比に勞苦して利益少きのみなり

第十一章　種穂の貯へ方

既に前章に説くが如く、此貯へ方及ひ遠方へ送り方は、挿木と接木とに於て大畧通用も、故に茲に併記して、其内に稍差別ある事は知らしむべし、抑何の仕方に用ゆるにも、前年の冬切取りて、其枝は明春の好期節にて貯る所以々落葉後に切込み置りざるべ、明年の結菓に害ある等の止は得ざる事抔にて、其時枝にても幹にても、充分に勢ある部は切取り、其長き儘にて、日當よく高く燥たる場所の粘氣なき土に、深さ六七寸の穿は穿り、其内へ是は横に入れて、先つ土は少

し覆ひ、又枝茂入もて土茂覆ひ能し間隙なき様
ま詰込み、其上ま再ひ、土茂五六寸盛りて適宜し
平均し、而して又其上ま、古莚俵等茂覆ひ、雨水の
滯り溜らぎる様ま して、貯置べし、是茂明春の好
時節ま掘出し、夫々ま用ゆるハ、勿論なきども、
挿木と接木とハ、大抵同ト期節なきバ、其一時ま
手の届らぎるら、又ハ接木ま て切捨たる者茂、挿
穂ま用ふるも、他所より一時ま多し取入たる者
まても、共ま手廻り兼たる時ハ、假ま北陰の冷な
る場所ま、二三寸の穴茂掘り、枝の全分ら又ハ半

分らを、横ま埋め、日々用ゆるなけを掘出して、其
餘ハ成丈暖なる風や日ま當らぬ様ま貯置べし、
大抵廿日位ら保ツ者なり、而して接木の用ま成
丈貯置て、妨害なき種類茂後ま残もま最前ま
り芽の未た固く小まして、青み茂含まぬ前ま切
取り置かぢ以上の如く漸々ま用ひて害なし、又
挿木ハら長き儘まても、一本宛拵ある者ハても、
右の法茂用ゐてまし、但し接木の種枝茂、二三日
も貯ら時ハ、濕地ま四五寸許木の方茂挿置べし、
又其穂茂餘分ま拵へて翌日まて貯へ置ハら、植

木鉢ハ土ニ入ル其内ヘ埋置てよし又種類ハ依てハ枝ニ寒中ハ切取り一束となし風當り少き床ノ下ヘ入置き稍萎たる者ニ水ハ浸し用ゆるもの有り然るに古昔ハ共ハ水ハ浸して貯ヘ置しとなれども永く水ハ浸置く時ハ挿木ハ皮と木質と離れ易きのみハ有りて挿て後も傷み易きれバ大ハ有しし又久しく切取置キバ生氣衰る故ハ暖氣ハして濕深き場所ニ善と思ふべきれども芽出るとハ却て冷所の木ハ早れバ是又宜しからん但し密ヘ入れ土ニ覆ひ風ニ防

ま貯置くハ至極の良法なり蓋し種穂ハ切りて酷ハ用ゆる能とも然し貯ヘがたき者ハ四五日位ハ害なし尤も前年ハ切貯ヘて害なきものなり又たとへバ梨林檎柿等の如し尚種類ハ依りて少宛の差ひ有きバ各其樹の条下ハ述ぶ示すべし

第十二章　遠方ヘ種穂の送り方

種穂ニ遠方ヘ送り遣ふ事ハ是亦挿木接木共ハ通用ハる者ハきバ併て茲ハ記すべし其仕方ハ先づ勢ある枝又ハ幹ニ切り成丈不用の部ニ捨

て、其本ハ尖らし、幾本よりても芋、大根の類は一二寸許り挿し、又ハ上ハ丸めて挿し送るべし、然し極遠方からバ芋、大根の類は挿たる穂ハ、尚又水苔まて包むべし、若し是水苔ハ得難きとれハ、濕たる藁屑ハ以て、穂と穂との間は挾み芽皮の摩合もぬ様はして、箱又ハ藁苞は詰込み、其上ハ莚まて巻き、縄まて固しめ、成丈風は中らぬ様はして送る時は、數十日へ枯きぬ者なり、然しなまを用心の爲として、油紙の類まて密は包たるハ、却て宜しからず、又梨類の如き生氣強き樹ハ、寒中は切りて、翌春まて其儘は置き、芽も幹も萎たる者ハ、半日程水は浸し用るて、隨分着くものなり、如是の者ハ芋、大根等ハ用ゆるは及ぶ、唯傷ざる様は、用心もべし、然し水は膨ませ事、なまり度々なきバ、却て着き難し、故は遠方より取入たる節は、たとひ萎れたりとも、若し期節より早きとハ、先其儘は土中へ埋置き、之ハ掘出して用ゆる法ではは、皺の舒ざらバ、其時水は浸し膨ましてとし、其例ハ挙バ、明治六年米國へ葡萄蔓ハ注文し、翌年二月下旬、數十日ハ経て來着せり、然るは其

蔓茎て水分ぬきたる様は見えしゆへは一時三十分の間全く水は浸し先つ日陰は假埋して後は畑挿法に用ゐたる者半ハ着生するを得たり

第十三章　畑挿の事

此法ハ容易く根を生ずして一年は長さ五六尺も成長する樹の種類を挿きは用ゆべし而して第四章は説たる島地の不同なき土質よして日光強き場所を擇み善く鋤返し石瓦草根の類を拾去り成丈土を細く碎きて平均し而して此畑の片端より東西は縄を張り其上に横足よして足丈宛次第は踏送きバ自然と足裏幅の畦を為して其中央は縄の線顕るべし其線より挿木の成長に計りて一尺五寸ゝ二尺位宛畦の間を開き又縄を張りて箇様は幾畦も作り（第六圖）而して種穂は樹の種類よりて違ひ有きども總長さ凡そ一尺位は上の端を剪みて梢を捨て而して其根本ハ切口は小破入たる様に除く様は梢先を傾斜は水質はあけて削り若し其穂一握の太さは

到り、木質堅くして容易に削り難きときは、山刀を用ゐて両側より刮ぎ（第七圖）如是に許多挿へ置きて、畑に之を、繩線の上に四寸位より一尺位の間を隔て、地挿杭（挿穂より稍細き杭、又は竹の末茂尖らして、穂茂挿もべき地所に先つ穴茂開く もの）茂以て、深き三四寸に突貫て穴茂開き、之に穂茂真直に五寸計り挿入き、周圍茂指り頭にて固く壓着け、密に風の通らぬ様に爲置べし。蓋し畑茂軟に鋤鍬せば土と木屑と綿密に附着して、根茂生じ易し。又日光の土中に通徹きば、生氣盛

にして白根茂生ずること早し。試に同種の樹同太の者茂同時に挿して、日蓋茂爲さざる處は、日蓋茂爲したる處より、根を生ずること十四五日に早くして、成長の状も自然と異きり。是茂以て日蓋茂掛け、或は地に挿込てなまり深きは、惡きと知る可し。然し品に依りては、妨げ多れども、暑中又秋陽の頃のまを烈き日光にて枯るることならば、日蓋なくて叶もぬかり、又あまり淺く挿もは、倒き易き恐なり。故に其程合を爲と斟酌べ、總て古より是等の者茂斜に挿たるは、根茂生ト易き道

理なきども其木後まくの字形ま曲りて悪し是亦畑の周圍まハ疎籬を廻して預め鷄犬ま防ぎ置べし扨出芽前ま草生ずたらバ穂ま觸ぎる様まして除くべし若し過て觸き動き木ま廻り少まても透ま ずバ指の頭まて壓塞ぐべし又鼠入たるバ其通り筋へ杭ま立て踏ま固く踏附べし尤も念ま入る者ハ畑の周圍ま高さ二尺五寸位の竹簀ま深さ二尺位ま埋め或ハ深さ一尺五六寸の溝ま掘廻もも亦し兎角此者入来らバたとひ穂ま倒さずしも其上と離きたる處より乾

きて槁る者なきバよく心ま用ゆべし

其芽生ずて二三寸も延たる中ま勢力壯まして両葉の間長くなりたるハ既ま白根ま生たる徴なきバ其時又草ま去り薄き水糞ま多くバ米泔水の腐ま動物の腐汁并ま長流水ま加へ三日程おき又ハたゞ米泔水の腐りたるもの丶みを澆ぎ又廿日餘りも過て彌盛ま長ずたるバ根本ま穴ま掘り或ハ片側を耙りて水糞ま澆ぎ懇ま手ま入る事より冬ま到りて掘出し假植する事等ハ都て第五章床蒔の条ま説たる如し此法

茂以て明治七年の春、二百坪の畑へ石梨茂挿木志て、六千九百本餘を得て、其中は善く長ひたるハ、八尺以上は到きり、其冬ハ砧木安直は志て三千本茂賣拂ひ、百本價金五十錢より一圓迄ホして、總計金二十三圓茂得たり、殘り三千九百本ハ、翌春接木砧は用ゐあり。

第十四章　埋挿の事

此法を用ゆる者ハ、挿穂より出ゐる新芽は直に根茂生ぜるゆゑ、成長殊は宜しく、且つ挿穂茂短くして用ゆれバ、種木寡き者を多く殖まは

ハ、至極便利の法なり、抑々此法を發明志たるハ、極近來のことにして、葡萄の一節茂切りて挿し、夫より新は生ドたる若幹は偶と志かゝりけれバ、殊は勝きて成長志たり、故は之茂態と掘出し見きバ、皆新幹より太く長き根茂生ド居ゐり、因て是茂園は植試多れバ、他法は作りし苗より意外は早く成長し、其中ホ蔓茂切込まずして植たる者ハ、其年ホ實茂結びたるもありし、是は正葡萄の如き着き易き種類も、接木志る事茂、實は無益なりと思ふは到きり、兎角挿木ハ皆、鬚根茂生

なるもの頗る多きなれども、太根を至て稀なる者なれば、翌年他に植着る時、其鬚根ハ多分枯きて、更に太根を生ずるが故に、其間稍暇取りて成長ひ、然るに此最初より太根を生ずたる者ハ、此患なきハ成長大に宜しく事必然なり、而して此法に用ゆる地質を勿論、畑を鋤返し畦を造り、地挿杭にて穴を開き、穂を挿して廻りを壓着置く等、都て畑挿に異ることなし、穂の長き丈四五寸にして、芽の着たる直に上を、芽に障らぬやう丁寧に切り、地挿杭を僅に二三寸の深さに貫き

て、其跡に挿きべし、又葡萄の類ハ、一節宛に切り、若し芽の間あはり短くして、一節僅に一寸位なるハ、二節宛にきべし、其切たる穂の削方ハ畑挿法の通りにして、上の端を極滑に削り、（第八圖）芽の半分程土に入るやうに埋めて挿きべし、若し晴天久しく續りバ、上の切口へ、砕たる土を一撮づゝ撒りかけ、其切口へ日光の當る迄防ぎ、新芽の延るに隨ひ漸々に土を加へて、凡三寸位の高き迄に盛上ぐべし、此法を用ゆて明治七年の春、八坪の畑へ米國種の葡萄蔓太き著位より線香

位まて茂挿木とまて、よく延たる者ハ、一丈以上
ま到り、數二百三十本を得たり、其上苗ハ十本の價
金三圓七拾五錢、下苗ハ同金二圓はでま賣拂ひ、
總金三十二圓茂得たり、同八年梨茂挿し試たる
ま、是亦同樣まよく着生またり、然れども接木砧
の用まハ、素と太く古き幹茂費ぶゞ故ま、是法まて
作たる苗木ハ、畑挿の者まハ及ばざるを知る、鬼角
此一事ハ、別ま便利のユ夫あるべしと思ハる
あり、

第十五章　垣挿の事

是ハ挿木茂以て直ま生垣茂造る法まして、先づ
其地の燥きたるゝ濕ひたるゝ茂相て、夫ま相應
なる木の種穗茂擇ひ用ゆべし、挿穗ゝ素と上中
の水氣茂十分ま噏取るゝ能ハざる者あるべ成
丈枝茂減ぜんが爲ま、其小なる者茂悉く切去り、
全長さ四尺前後まして、梢茂少し摘み、根本茂前
法の如く斜まして、稍長く削り、尚其太き者ハ、小
刀茂以て本の切口より、三四寸の處の外皮丈ま、
双方より互ひ違ひま、一二箇處の刻み茂附置き、
（第九圖）而して垣茂造る場所の、七八尺の間毎ま

杭を打ち之を片側の押縁栽二段を當て假を結び置き第十圖之栽定規として品類を依り地埴杭栽二三寸より五六寸の間を立て深さ四寸許りの穴栽開き穂の成丈不同なき者栽五寸許り土中へ挿て其廻り栽堅く壓し之栽殘らず挿了らば復た片側の縁栽あて縄を以て堅く結びしめ尚又地元栽両側より容を踏固め或ハ木槌を以て輕く搗着れき時々草栽去り鼠栽防き尚成長惡しきときハ前法の如くに肥糞栽澆ぐ可し

菓園栽築くるハ周圍の籬かあらば嚴密なるべうとに是栽時々作りかへバ費用夥多なるが故に其土地に應じたる生垣栽造る栽以て便利とに其年々修繕の費ハ摘取たる枝葉花栽以て大抵に償ふべき方法栽立つべし

第十六章　代挿の事

此法ハ挿穂の一ヶ年にてハ菓園に植着る如く成長せず或ハ速に根栽生じがたき類の木栽挿して久しく苗代に置き或ハ地面栽多く費やさざるが爲に容に挿す者に用ゆ其場所ハ島地の水氣強き處にて黒色の墳壇土栽擇び善く鋤返し

平に準し、其内に幅三尺の代に長さハ意に任せて幾筋も仕切り、其間に幅一尺五寸許り に、稍高くして、手入培養往来等の道とし、第十一圖イ種穂ハ畑挿と同様の長さにして、之に横側に三四寸の間に隔て、地挿机に用ゐ、北にても西にても、其竪に かりたる方へ少し傾き、深さ三四寸に挿し、若し土堅くして挿難きときハ、地挿机を用ゐ、指の頭に以て、廻り に固く壓つけ、既に一行に挿了らバ、凡五寸位の間に隔て、復た幾行も挿キ了し、第十二圖ロ)是又鶏犬等に防ぐ籬を構へ、法の如く草に去り、鼠の通路に塞ぎ、其根を生ぜたる に伺ひ、小両の節水糞に浣ぐ等、都て懇切に手を盡すべし、左もなきバ其内にも、生氣壯にして、接木砧とも爲にべき者も、出來るなり、扨冬に到りて寒氣に催さバ、常緑樹ハ其儘にて、根元へ穀糠に掩ひ、柴笹の類に立て、落葉樹ハ片端より掘取りて、便地に假栽し、藁屑に以て覆ひ、既に春になりて暖氣に催さバ、共に苗畑に出して植着べし、又春挿の常緑樹ハ、日蓋にたよるべきども、極暑中の日光烈しく間ハ、掩ふに

も但し落葉樹とても同様なり此法ハ多分梅柿
枸橘の類ハ挿きを用ゆ

第十七章　牀挿の事

前の數法にてハ着き難く殊ニ成長も至て遲け
れバ穗ハ短くして稠密なる挿き仕方なり其場所
ハ大木の蔭ふる島地ハ善し鋤返し土塊木根ハ
拾去り水の潴溜ハ防ぐ爲ニ一方ハ高く
して斜ニ平均し高き方より低地ニ向ヘ四尺位
の幅ニ二筋の繩ハ張り其間の土ハ削取りて之
ハ其次の幅一尺五六寸の處ニ二寸位ニ高め是

ハ手入等の通路とし箇樣ニ幾筋も建て其低み
ニ細ニ碎き篩ひたる黄色又ハ赤色の新土（是ハ
細軟砂四分の一ハ交へたる者ハ別ちて宜し）ハ
二寸餘ハ入れ板を用て一面ニ平均し上面のみ
を踏み又ハ擣き固めて第十二圖に其廻りへ長
き四尺位の竹柱ハ六尺ニ九尺毎ニ立て其下一
尺許りハ地中ニ貫ク南側ニ成る方ハ五寸程
低くして其柱の頭へ長竿ハ渡し其處ニ尺餘の割
竹ハ撓め挾みて固く結しめ又柱の左右ニ開う
ぬ爲ニ竿ハ渡して雙方ニ結止置べし（第十二圖

已扱挿穂ハ新枝の楢茂長さ四五寸より一尺位
迄小枝茂二三本附サて切取り根元茂畑挿の穂
の如く削り第十三圖地挿杌茂以て横幅を葉と
葉と少し觸合位迄深さ五六分の穴茂開き穂茂
一寸計り挿込て本の廻り茂指よて固く壓着ス
一行挿終らハ夫より次の行まて亦た葉の少し
觸合位迄間茂隔て幾行も挿まべし第十二圖ハ
挿終りて後小木蔭まて日光さ甚ど強うゝぬ場
所かゝハ葭簀茂一枚又強うゝハ二枚茂竿の上
迄展て日蓋と爲べし第十二圖ニ而して此蓋
を晩景まハ取除て夜露迄暴し朝ハ復た掩ふべ
し若し手廻らねハ其儘ニ掩置も妨なきども
着生の狀況角大迄劣る者あるをハ根茂生ぜる間
ハ勉て之茂行ふ茂大迄佳とし而して時々草茂
去り之り爲ニ蒸朽抔の禍茂防ぎ乾多るとしハ
少々の水茂澆ぎ根生ト芽延たりハ小雨の節薄
き水糞茂度々上より澆ぐなどの手入茂あし最
早日の光弱くして稍冷氣茂催さハ全く日蓋茂
除き十分の光茂受しむべし總て以上の説ハ春
芽固りて夏芽出んと欲する時迄挿ま者あり然

る春芽綻る前に挿す者は葉柄を剪みて梢の一二葉のみを遺し穂拵を為すを前法の如し第十四圖又日蓋を用ゐず唯日光の強く強くして葵を傷む時のみ根株生ずるまで薄く葭簀を掩ひ或は葉附の柴を立つべし又秋挿すにも挿て後暫時日光強き時のみ日蓋をしてとし而して霜降る頃よりは穀糠を以て挿木の見えぬ様に掩ひ置くべし又は之を根本のみに入れて其上を古俵の類にて南北三尺位の高さに地面につけて掩ふもよし是を翌春雪霜の稍消ゆる比より漸々に取除き春分比までに全く去り既に春分を過ぎ片端より掘りて苗畑へ植着べし然るに新土を細に碎きて篩過もし其操作甚だ煩勞なれば之を簡易にするの法を熟土を先つ掘除きて新土の處に到らば鋤廉を用ゐて薄く削りとり之を大氣中にさらし置かば自然と篩過したる樣に成るものなり然れども是も態と篩過したる者は又むざれば寡小の種木を是非着けんと欲するものなどには用ゆ可からず又止を得ずして高く燥き

る土地ゟ挿も者ハ濕潤の絶ぬやう小度々水茂
洗ぐべし

第十八章　玉挿の事

此法ゟて挿ゑる者ハ成長至て遲れども根茂
生ぜるゝ最も困難なる種類の木茂挿ゟハ至
極の良法とす其法ハ先つ黄色又ハ赤色の新土
茂水ゟて練り是茂床挿法の如く造たる挿穂乃
其根木ゟ鷄卵の太きゟ丸く握つけ（第十五圖）同
法の通りゟ拵へたる地床ゟ（但新土茂入るゟれ
よむ）葉と葉と互ゟ觸合ハぬ位ゟ密ゟ植着て

手入培養等都て同上の法の如くすべし又一法
ゟハ植木鉢又ハ箱などの底に水抜穴茂開けれ
き大豆位の新土の塊茂一二寸わと底へ布き其
上ゟ肥氣多き熟土茂入れ水乃滯らぬ樣にし之
ゟ玉茂附たる穂茂植着ゟ前説の如く日蓋茂か
し若くハ日蔭ゟれきて灌水培養等茂施きバ能
く着生成長べし是茂冬の中ハ寒氣茂防置き春
暖の時ゟ到りて苗畑ゟ移栽るゝ

第十九章　割挿の事

此法ハ脂多き種類の木茂挿ゟ用る或ハ穂の

本茂削る代りとも用ゆべき仕方として譬バ櫛の類の挿穂茂床挿法ハ用ゆる長さハ切り其切口茂平滑ハ削て其細き者ハ本より五六分の處茂二つハ割り太き者バ六七分の處を四つハ割り其間へ小豆位の新土茂挾み（第十六圖）床挿法の地床同様ハして挿し固く押着置べし是ハ其割口より膚肉巻上りて根茂生ぜしむる爲なれバ必ず其口茂よく開きれくを大ハよ為し又是茂王挿法の如く練土茂根元へ握りけて挿もハよし而して手入培養等ハ都て前の二法と異る事なし古昔ハ挿木ハ專ら此法を用ゐたれども近來ハ種々の法茂發明して多き木類ハのみ用ゆる事とハなり侯

第二十章　撞木挿の事

是法ハ挿穂の本ハ古枝茂連ねて切とり撞木の如く造り之茂上中ハ挿して容易ハ動ぬ爲ハ出たる者なり之茂近來ハ多く世上ハ用ゆ者ども未熟の人の爲ハ古枝を連ねて土中ハ埋置くハ故ハ操作稍疎略ハして多とひ觸動かもありても能く着生もるなり其穂の長さハ床

挿法の如くまして連枝置たる古枝ハ穂の杈戔中央ゆして都合一寸許りゆ恰も撞木の形ゆ切り其切口戔稍斜ゆ平滑ゆ削るべし第十七圖是戔床挿法の如き地床ゆ挿し或ハ玉挿法の如く玉戔握りつくるもよし其他手入等ハ都て前法と同様たるべし

第廿一章　泥挿の事

此法ハ木蔭又ハ流川の邊ゆ横幅三四尺長さハ何間ゆても深き三四寸の土戔掘去りて低くゆし其内へ新土戔入れ水戔灌ぎて田の苗代の如く善く肥交せ第十八圖其處稍固りたる時挿穂の根本二三分の處戔斜ゆ削り第十九圖之を少し斜ゆ植て泥乃中へ六七分ゆ葉と葉と互ゆ觸合ふ位ゆ近く挿置ハ自然と水乾きて床挿法の地床の如く平ゆ固くなるゆ其處若し日光強きれバ日蓋戔爲し又水氣涸て照破きぬやうゆ時々見廻りて水戔少宛澆き其外防寒移栽等の事ハ床挿法ゆ準ふ都て此法ハ簡易ゆして善く土戔墾し勞せずして地面戔平らゆし速ゆ數多の穂戔挿きべくれバ至極便利の法と

云べし。但しあれを菓樹よりも用ゆれども多くハ杉より用ゆるものなり。

第廿二章　横挿の事

横挿法又横伏といふハ長き種枝を地より横に埋め其一本より數本の芽及び根を生じたる者を冬に到りて切分け植る法にして地床ハ畑挿の如く拵へ長き穂の本の端を斜に削り梢の柔なる部を去り第二十圖畦の縄跡の線へ地挿杭を以て斜に六七寸の穴を開き其跡へ穂の本を七八寸挿込透間なきやうに壓し付け次に其穂の梢と少し重る位に其下に以前の如く再び挿し如是に一畦挿了らバ其穂の上に芽に障らぬ樣に輕く踏着て鍬にて上に一二分ばかり復た輕く壓着れば其穂既に芽を生じ根を延ばす隨ひ草を去り新條へ土を掛ける法の如く手を入れ冬に到り掘出して一本宛切分ち根の善く生じたる者ハ直に苗畑に移栽へ接木砧にもなるべし。但し根を生じ難く惡しくして短き者ハ翌春を待て移し栽べし。此法ハ素より葡萄又ハ桑の類の根を生じ易き者を作るに地面狹くして多く

作り得るゝハ兎角便利なれども残しゞ用達やうゝ出来るゝハ覺束なし

第廿三章　挿木の餘論　附窖挿　寒挿　芽挿の事

右十法の他ハ窖挿と云者ハ此窖ハ土戔以て四方の壁戔土藏の如く築建て硝子板戔以て屋根とし日光の照臨戔許し煦育戔受るゝ廣闊ハ於ふゞ如く且つ寒中ハ此内ハ蒸氣管戔通し温度戔適宜して夏季の花ハ隨分自由ハ開のしむゞし而して以上の法ハ此窖の内ハて挿木戔爲ものゝ然し此温窖ハ專ら挿木の爲ハ設たる者ハあらざるハ茲ハ其製造の法戔畧し煦唯其簡易の一法ハ第五章の床蒔ハ用ゆゝ如き硝子障子戔設たる者あり若し十月以後ハて止戔得ず挿木する時ハ此内ハ蒸糞戔布かゞ唯床蒔法の如く地床を作りて挿すべし其時土地の氷結る戔見バ其上ハ古俵の類をれゝひ畫間ハ取除きて日光戔受しめ善く手入培養戔怠らゞるゝ如ハ頗る着生戔得る者なり又寒挿と云ハ極寒中といへども畑挿埋挿又ハ代挿の如くハして挿穂の上ハ直ハ土戔厚くれりひ或ハ杉の

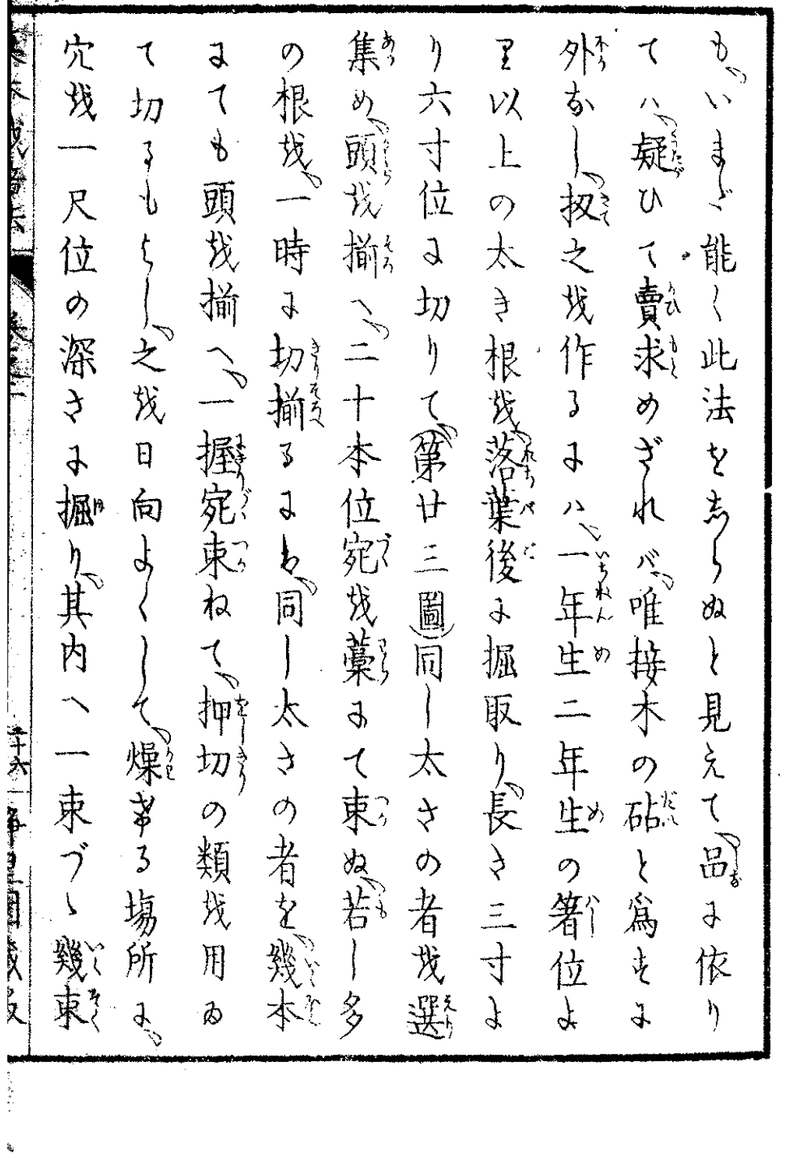
皮う植木鉢の類茂以て嚴しく寒氣茂防ぎ置あで着ざるもあり然きども曾て之茂試あるに勤勞多き上は種穗短小なれバ芽出る迄は損傷寡のしばして枉は地面茂費やせり故は此穗茂好期節まで貯置き傷めるを擇去りて挿も茂大は勝きりと意へり又芽挿と稱もるハたゞ芽のみ茂六七分の長きは削取り（第廿一圖内外）鉢の内へ床挿の如く地拵を爲して挿も法あり（第廿二圖）之茂試さる者半も根茂發して着生また きども種穗微小なるが伸へは成長もる事悪き

れバ良法と稱しがたし就中西洋は專ら稱用もる法も亦上法の如く穗茂三四寸まして直は芽附の裏茂深く削るなり然るは斯の如く穗短く生力微なる者は木質茂削るとは雖も廣サも バ兎角膚肉行屆き兼たる處より木心は腐入り て成長のきと同樣なり其外挿木の法多といへども著しき利益なし且つ菓樹は用なきバ都て省き置べし

其三　根吹法

第廿四章　根吹の事　附長伏の事

根吹ハ善き菓樹の根株切りて埋置き是より藥株生じたる者株植へ育る法なれバ挿木とハたゞ枝と根との違ひのみなて其理合ハ全く異ることなし故ゆ挿木の如くよしてゝ變生もるとゝ熟時遲くある杯の事なく而して實蒔よりハ成長速ゆして又接木の如く接口より折き離き或ハ木口へ腐入る等の患なれバ至て便利の仕方なり然るゆ昔より桐桑楮株作るゆハ專ら此法株用來たれども今日の如く種々の苗木株作るを株知らざるハ書ゆ著したる者もなし故ゆ世上の人も未だ能く此法をたしなぬと見えて品ゆ依りてハ疑ひて賣求めざれバ唯接木の砧と爲もゆ外なし扨之株作るゆハ一年生二年生の箸位ゆ以上の太き根株落葉後ゆ掘取り長き三寸ゆ



り六寸位ゆ切りて第廿三圖同じ太さの者株選集め頭株揃へ二十本位宛株藁ゆて束ぬ若し多の根株一時ゆ切揃るゆハ同じ太さの者を幾本ゆても頭株揃へ一握宛束ねて押切の類株用ゐて切るもよし之株日向よくして燥ける場所ゆ穴株一尺位の深ゆ掘り其内へ一束づゝ幾束

も立並へ細く碎たる土戔根の間ゟ善く入るやうゟして埋置べし種類ゟ依りてハ三年以上の古根も用達さゞるも間ゟ又芽戔生ぜゞして枯る者あれバ成丈一年生の勢力よく肥たる根戔用ゆる戔大ゟ佳とし扱春分より少し前ゟ第四章ゟ示せる苗畑へ右の根戔一本宛立て頭を少し顯して植着べし其植着る距離ゟ樹の種類ゟ依て太抵四寸位より一尺位までの差あり其顯きた頭より芽戔生し漸々成長する間の手入培養及ひ落葉後ゟ此苗木戔掘揚げ假栽する等ゟ都て實蒔法ゟ依るべし而して之戔掘揚ぎ其根戔五六寸四方ゟ切詰る時ゟ切捨たる屑の箸位より太き者ハ悉く選集め前説の如く切揃へて貯置き明年の種根と爲ゟ蹈し故ゟ一度此法戔行ゟ以後種根戔求むるの勞なく苗木師ハ或ハ之戔買賣する者あり曾て此法を以て明治七年百坪の畑ゟ李戔作り三尺以上の者二千本戔得たり其内千本ハ百本價金一圓七十五錢より同二圓二十五錢ゟ發賣し總計金十九圓餘戔得る其餘ハ或ハ畑ゟ植着ぎ或ハ實戔結バ為めて賣拂

ふ爲ま瘠地ま植着し者翌年の冬ま到り丈五六尺まして荅茂稠密ま着あり。

別ま長伏と唱る一法ハ長き根茂横ま埋て土茂五六分程ニのけれけバ是まり數本の新芽茂生ト たゝ者茂冬まいたりて掘揚ゞ一本宛切離して植るれども兒角苗木ま不同ありて惡きれバ之茂行ふ者至て稀あり。

其四　株分法

第廿五章　株分の總論

株分法ハ種木の株本まり生ドたる新蘖へ土茂かけ根を生ぜしめて之茂分ち育る仕方まして是ま自然分と壓抑分との二種あり共ま其切用ハ太抵取木法ま異るとなし然ども それまり操作簡易まして大ま便利あるとハ古まり桑の壓抑分苗茂作りて諸人のよく知るる如し。

第廿六章　自然分の事

自然分ハ榛樹苺類の横根まり新蘖出たる者茂分ちて苗とする仕方まして先づ寒中ま根の廻り二寸許り茂穿ち其内ま根茂肥もべき肥糞茂流き土茂覆ひ被けバ翌春ま到りて必ず横根ま

静里園藏版

り多の蘖枝生ト、并ま新根枝も生じべし、其蘖の漸々延るま隨ひて、肥糞枝幾回も澆ぎ置うも、其冬ま到りて、幹根ともま親木の如く長ド、其翌年ま右必ど實枝結ぶべし（第廿四圖）扱落葉後ま、其苗枝掘て切分ち、先づ便地に假栽し、其後冬ま春化頃までま、幹枝共に適宜く切込ミ、菓園ま移栽るあり、又苹菓、櫻桃の類ま、根木ま自然に蘖枝多く生ぜる者あるべ、其蘖の三四寸も延たるとき、肥糞を澆ぎ土枝覆ひ、草枝去りて、又澆ぐ事度々かるべ、必ど蘖ま根枝生ト、幹も亦隨て長大あるべし、是枝好時節ま切分て、苗木と爲ま仕方あり、是法ハ若し親木ま、實枝収る者あらバ、甚た其勢力枝損ぜるの害あるべ、之枝行ふま大ま宜しからず、

第廿七章　壓抑分の事

壓抑分ハ通例世上ま刈桑枝作る如く、畑ま種木枝栽へ、其株ま生ドたる新蘖枝壓抑て、土枝覆ひ、既ま根枝生ぜバ、之枝切分ま、如是ま、て年々ま苗木枝作る者あり、其仕方ま、稍濕ある畑を鋤返ま、深き二尺許りま、て畦間四尺毎に、深さ

一尺位の溝を作り其内に二尺五六寸の間を置て造糞の類を多く納れ其上に土を少し加へて切交へ冬落葉の後に挿木根吹又ハ取木にて作りたる種木の根太く且つ多き者を擇みて其内へ大抵五寸位低く栽着け幹を地並に切去るべし但し接木したる者ハ種木に宜しからぬ扱翌年四月上旬比肥糞を流ぎ既に蘖を生ぜバ其中より勢力壮なる者二三本を残して其餘を去り其後七八寸も延し頃横に小枝を生ぜば是亦取除きて再び肥糞を充分に流ぎよく乾くに到り

て日中に氣條の乾き萎たる状を伺ひ其外面へ向たる方の皮のみ本より二三寸の處を爪か小刀にて一寸程竪に剥ぎ（第廿五圖）是を静に壓抑て横に撓め上を覆ひて地面より五六寸も高く置べし（第廿六圖）然る小其後廿日餘りも過ぎバ草を去り株の中央又ハ其廻りを少し窪め肥糞を流ぎ其乾きたる時に土を覆ひ小枝を去り如是に手入培養怠らぜバ冬に到りて五六尺も成長し根も多く生ずべし是を落葉の頃掘取りて株際より切離し他所に移栽べし尚種株ハ

廻りの上茂去りて、四五寸も地上より出し、細根茂切捨て、木口茂平滑より削り、肥糞茂流置きて、翌年四月頃より、又肥糞茂流ぐと前の如くなし、年々之茂行ちゞ、其株次第に肥へ太りて、萌蘖を増し、遂に一株より、年々十余本も得るに到るべし、曾て此法を用ゐて、桃李茂作りたるに、世上によく知きる桑苗の如く、幹根ともに十分に發生して意外に成長せり、

其五　取木法

第廿八章　取木の總論

取木法は、變生木の實茂結べども、從來種子かけきゞ、實蒔も出來ざる者、或は挿木もるとも、根茂生ぜざる中に、枯る者の類茂殖もるに、二年も三年もかゝりて、枝又は幹より根茂生ぜしむる仕方なり、是亦種木の形狀に依りて、施す方法も一樣ならず、故に壓取、筒取、伏取の名目ありて、古昔より人の能く知る所なり、素より之茂施すべき期節とては無きまでも、挿木に宜しき時節茂、極最上とし、芽茂生ぜぬ時も、本幹と上枝とは其儘にきて、唯下枝のみ茂撓め取らんとせば、土中

より受る養液を直立の幹枝まのゝ送りて能く下枝まで達せざるときハ成長悪しきのみまで非ず根株生ずること至て鮮し故まで之株行まで触て本幹等株切去らでハ叶ひぬもの此法ハ鬼角是等の難事あるゝ故まで近来ハ菓樹の苗木株作る者都て之株用ゆるを稀なり而して其方法の如きハ古来委しく述へ記ある書も多けれバ今茲まで其大略株記れくあり

第廿九章　壓取の事

壓取ハ地上より二三尺の高處なる枝まても撓めて土株覆ふべくバ抗株うちて縛るゝ又ハ石まて壓鎮るゝまて根株生ぜしめんと思ふ處まで小刀株以て二三箇處の疵株つけ第廿七圖ロ之まで肥氣ある土株盛りのまて能く包込れくべし

第廿七圖ロ其他手入培養等の所作ハ都て株分法株見合せて取計ふべし

第三十章　筒取の事

筒取ハ枝太くして撓め難く又ハ高くして地まで埋め難き者株取木せんと欲するとき大竹株一節殘して五六寸の長さまで切り二つまで割り節の

中心より枝の入る程の穴を開き、（第廿八圖）其節を下まして疵を附者れきたる幹、又ハ枝を狭みて合せ、外より縄まて巻き、筒中へ肥土を透間なきやうに納まれくなり、（第廿九圖）是を時々見廻りて、水を灌ぎ、土の乾かぬ様に心を用ゆべし、又筒の代りに藁苞（第三十圖）を用ゆるもよし、其他手入等の事ハ、全く前條に同し、

第廿一章　伏取の事

此法ハ取んと欲する木の枝より、數本の芽を生ずるに、既に四五寸も延たる時に、新芽の皮を壓抑分法の如く剥ぎ、其枝を撓めて杭に結附け、横挿法の如くに肥土を以て覆ひ、くるり（第三十一圖）其手入方ハ、都て横挿法に見合せてよし、

第廿二章　苗木育法の餘論

以上の外に、接木と挿木と、一同に施す方法ハ例へるに枸橘の枝を一尺餘に切りて、柑橘類を接ぎ、之を直に土中に挿して、頗る能く着生を得るが如し、是も小葉の者に、大葉の者を接ぐが故に、成長殊の外宜しく、其他箇様の方法も、世上に許多ある歟、菓樹の爲に格別

の用ゐられバ強て詮議を要せず唯切に冀ふハ
是迄反覆説示せし如く菓樹ハ穀菜類の一年草
の如く年々交換耕の出來ぬ者なれバ最初植附
の節苗木の善惡に懇に點査して永年繁茂の基
を建て因又之を作るハ皆挿木根吹の二法に
以て良好の者を得る如く令一層の工夫を凝し
良法を考察して善種を多く殖し營業者の爲に
椿益を謀らんを世間若し此事に於て新術の
發明ならバ請ふ幸に教示を垂れよ

菓木栽培法卷之二 終